

午後の談話室

第25回

経済学部 国際環境経済学科

米山 昌幸 教授
Masayuki YONEYAMA

獨協大学経済学部卒業。立教大学大学院経済学研究科博士前期課程修了、チェース・マンハッタン銀行を経て、神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学。1993年に本学経済学部専任講師として着任、2004年より現職。博士(経済学)。

主要担当科目: 国際貿易論

研究分野: 国際貿易理論が専門だが、貿易と環境、貿易と開発など、持続可能な開発のテーマに関心をもつ。

学生へのメッセージ: 「国家間の貿易は最も誤解が多い分野。一見すると正しそうに見えることが、理論分析によってじつは間違っていることがわかったりします。学生にはグローバルな視点と理論的な思考方法を身につけてもらいたいです」

好きな言葉: 一期一会

好きな音楽: ZARDの楽曲にはいつも力をもらっているという。「坂井泉水さんの1周忌の追悼コンサートにも行った。体力が落ちた最近では、マラソンの40キロ過ぎで『負けないで』がスピーカーから大音量で流れてくると涙が出る」と話す。

SDGsに自分事として取り組む

学生だからこそできること

キャンパスのわきを流れる伝右川の再生から、地域活性化、地球温暖化問題、そして途上国の貧困問題まで。米山先生は、「持続可能な社会を創る」という理念を掲げて学生のさまざまな活動をサポートしている。

「学生には『君たちがやりたいと持ってきたものは、ぜんぶ実現させる』と言っています。でも、学生が躊躇しているときには私が先導してやることもあります。社会に学生を連れ出し、アクティブに活動するというのは国際環境経済学科のコンセプトの一つです」

2016年12月に始まった「獨協大学環境週間・EARTH WEEK DOCKYO」も、そうした活動の一つだ。エコをテーマにイベントを開催したいと声を上げたのは、当時4年生になっていた国際環境経済学科の1期生。企画立案から開催までやり抜いた実行委員会の学生たちは、準備の大変さに次回開催は1年後を考えていたが、米山先生は電力需要期となる夏の年2回開催にするよう鼓舞した。回を重ねるにつれ他学部の学生も実行委員会に加わり、今では大学全体を巻き

込んだイベントになっている。

「若い学生だからこそできる提案があるし、学生だから受け入れてもらえる。社会の抱える課題を自分事として取り組むことができれば、学生には十分に社会を変える力があるので。なによりも学生自身が地域や行政の方から『よくやってくれたね』と声を掛けてもらえれば、やりがいも感じ、自信にもつながります」

これまで、コンテストや事業に参加したい学生を全学から募集してきた。指導したチームがコンテストやコンペに出場して賞を獲得したり、新聞社の取材を受けたりすることも。これまで埼玉県や福島県など、自治体が主催する事業にも参加している。

出会うをひるひるひる

そうした成果を喜びながら



も、米山先生は「企画提案した活動を通して、向き合った課題は解決されたのか」と、改めて学生たちに問いかける。「度々きりでのコンペやイベントで終わらせず、持続的な取り組みにすることを強調する。また、学外の活動が増えるにつれて新しいつながりが生まれて、学外からさまざまな依頼も舞い込むようになった」。

「プロジェクトが増えるばかりで、忙しくなる一方です(笑)。それでも、SDGs(持続可能な開発目標)に向けて学生が挑戦する機会をもっと増やしたいし、興味を持っている学生ともっとつながっていききたい。そして、『持続可能な社会を創る』という理念を全学に広めて、次の世代の学生へつなげていきたい」

この春からはキャンパスに学生がいない期間が続いている。「直接顔を合わせて話をすることの大切さを再認識しました。早く、学生と活動できる日々が戻って欲しいですね」

MY LINK, MY LINE

米山先生が生まれたのは、獨協大学の開学と同じ1964年。高校までを故郷・山梨で過ごし「語学の獨協、というグローバルなイメージにもひかれて」本学に進学。大学時代から趣味で市民マラソンに出るようになって、今でも走り続けている。また発展途上国の債務・貧困問題に取り組んだゼミでの先生や仲間との出会いは、その後のキャリアへとつながるものに。大学院への進学、母校への着任、自ら学科名を考案した国際環境経済学科の設立など、人生の節目で先生を導いたのは、それまでに出会った人たちとの“縁”でした。

多くの学生と親しく関わり、相談ごとにも親身になって応える米山先生。親しみやすさと人懐こさから「学生には、パーソナルエリアが狭すぎ!」と言われてます(笑)」